

〔短 報〕

在宅療養者を支える家族介護者の他者へのケアの委譲 — 家族介護者に関する質的研究のメタ統合から —

辻村真由子¹ 篠原 裕子² 藤田 淳子³ 片倉 直子⁴ 石垣 和子⁴ 山本 則子⁵
小笹 優美¹ 磯部有紀子⁶ 園田 芳美⁷ 黒河内仙奈¹

Conditions under Which Japanese Family Caregivers Would Entrust Their Responsibilities to Others:
A Meta-Synthesis of Qualitative Studies on Family Caregivers

Mayuko Tsujimura¹, Yuko Shinohara², Junko Fujita³, Naoko Katakura³, Kazuko Ishigaki⁴
Noriko Yamamoto-Mitani⁵, Yumi Ozasa¹, Yukiko Isobe⁶, Yoshimi Sonoda⁷, Kana Kurokochi¹

要 旨

本研究の目的は、領域を横断して家族介護者の体験が記述されている質的研究論文の知見をメタ統合することにより、家族介護者の他者へのケアの委譲の様相を構造化することである。1980～2006年の間に千葉大学大学院看護学研究科に提出された学位論文を対象として、選定基準を満たす在宅で暮らす疾病・障害・老いを有する者を介護する家族員を対象とした論文を選択し、Paterson(2001)ら、Noblit & Hare(1998)のメタ統合の手法を参考に分析を行った。地域看護学、訪問看護学、成人看護学、老人看護学、精神看護学の領域にわたる13論文を対象に分析した結果、以下が明らかとなった。

家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動として、(1)介護を抱え込む、(2)一人で介護をやってゆける、(3)拘束的思考から脱却する、(4)他者にケアを委譲する、の4つが見出された。また、家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動への影響要因として、(1)委譲に向かわせる要因、(2)委譲を促進する要因、(3)委譲を減退させる要因、(4)家族介護者を後押しする他者の行動、の4つが見出された。これら4つの家族介護者の認識と行動および4つの影響要因を構成要素として、家族介護者の他者へのケアの委譲の様相が構造化された。

本研究で得られた知見から、家族介護者の介護の抱え込みの状態と一人で介護をやってゆける状態の見極め、家族介護者の介護の抱え込みの状態を理解した上での働きかけの重要性、家族介護者を他者へのケアの委譲に導く働きかけのあり方、家族介護者が一人で介護をやってゆける状態の見守りの必要性の視点から、看護への示唆が考察された。

Key Words : メタ統合, ケアの委譲, 家族介護者, 在宅療養者

I. はじめに

近年、家族を病者の背景として、あるいは病者に介護を提供する資源として活用しようとする視点から、家族をケアの対象として捉えようとする視点へとパラダイムの変換が起こってきている¹⁾。家族への支援方法を検討するにあたり、病者をか

かえる家族の体験を明らかにするための研究が、それぞれの看護領域において様々な観点から多く行われてきている。しかし、家族を対象とした研究の知見を統合するというとりくみは、終末期がん患者を抱える家族員を対象としたもの²⁾や障害児を育てる家族を対象としたもの³⁾がみられるも

1 千葉大学大学院看護学研究科

2 健和会綾瀬訪問看護ステーション

3 日本赤十字看護大学

4 千葉県立保健医療大学

5 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

6 前千葉大学大学院看護学研究科

7 訪問看護ステーションしずおか

1 Graduate School of Nursing, Chiba University

2 Kenwakai Ayase Home-Visit Nursing Station

3 The Japanese Red Cross College of Nursing

4 Chiba Prefectural University of Health Sciences

5 Graduate School of Allied Health Sciences, Tokyo Medical and Dental University

6 Former Graduate School of Nursing, Chiba University

7 Home-Visit Nursing Station Shizuoka

の、まだわずかであり、さらに領域を横断した知見の統合についてはほとんど行われていないのが現状である。

在宅で介護を行う家族の介護プロセスに焦点を当てた研究をみると、介護役割の引き受けや受け入れの段階に着目した研究は散見される⁴⁾。しかし、看護職が家族に出会う際には、すでに家族の誰かが介護役割を引き受けていることが多く、その役割の調整にかかわることも多い。そこでわれわれは、家族介護者への支援の大きなテーマの1つとなっている「家族介護者の他者へのケアの委譲」に着目し、老年、精神、成人といった領域を横断して質的研究のメタ統合を行い、その様相を明らかにしたいと考えた。

II. 目 的

家族介護者の体験が記述されている質的研究論文(以下、一次論文)の知見をメタ統合することにより、家族介護者の他者へのケアの委譲の様相を構造化することを目的とする。

III. 用語の定義

家族介護者：病気や障害をもつ在宅療養者の介護を主となって担っている家族員を指す。

家族介護者の他者へのケアの委譲：家族介護者が在宅療養者に対して行っていたケアを、他者にゆだねゆずること、任せること。他者には、フォーマルサポート、インフォーマルサポートの両方を含む。

IV. 方 法

1. 対象論文の選定

メタ統合は、「質的研究から得られた結果の統合や比較から形成された、理論、大切な語り、一般化、あるいは解釈的な言い換え」と定義されており⁵⁾、メタ統合により、過去に産出された複数の独立した研究を分析し直して統合することや、一次研究を行なった研究者の関心とは異なる関心からの二次的な分析を行なって新たな知見を見出すことが可能となるとされる⁶⁾。この分析に耐えうるためには、研究論文としての質が保証されており、研究結果が詳述されていることが必要である。そこで、上記の条件を満たし、閲覧可能であったことから、千葉大学大学院看護学研究科における1980～2006年の間の学位論文約552編(博士論文85編、修士論文467編)を対象とした。当初領域は制限しなかったが、小児看護と母性看護の領域は、「介護」という現象に「養育」という視点の

異なる要素が含まれたため、対象からはずすことにした。最終的な一次論文の選定基準は、1)質的分析を用いた研究であること、2)在宅で暮らす疾病・障害・老いを有する者を介護する家族員を対象にしているもの、3)データの解釈・分析のもととなる、事例レベルの記述があること、4)研究論文著者に本研究の趣旨を説明し、著者から使用の許諾が得られたもの、とした。

2. 研究期間：2006年8月～12月。

3. 分析方法

Patersonら⁷⁾、Noblit & Hare⁸⁾のメタ統合の手法を参考に、以下の手順にて実施した。

- 1)各研究メンバーが2～3編の一次論文を担当し、それぞれの論文から、「家族介護者の他者へのケアの委譲」について記されている研究結果と、その結果を導出した記述データを抽出した。それを簡潔な一文に表し、ラベル化した。次に、内容が共通しているラベルをグループ化し、グループの内容に適合する言葉で表現した。ラベル化、グループ化に当たっては、概念化した内容が一次論文の概念やデータに表れているかを確認する作業を行い、研究メンバーの合意を得ながら分析をすすめた。
- 2)グループ間の関連を検討し、「家族介護者の他者へのケアの委譲」の様相の観点から構造化をして図示した。
- 3)最後に、統合された概念やその関連図に照らして、研究メンバー各自が担当した一次論文の概念やデータを再検討し、「家族介護者の他者へのケアの委譲」の様相として矛盾がないかを確認した。

V. 結 果

1. 対象論文の概要

分析対象論文は13編で、内訳は、博士論文5編(地域看護学領域1編、訪問看護学領域1編、成人看護学領域1編、精神看護学領域2編)、修士論文8編(地域看護学領域3編、訪問看護学領域3編、成人看護学領域1編、老人看護学領域1編)であった。要介護者の状況は、終末期がん、精神障害、認知症、難病、脳血管障害、その他高齢によるものであった。

2. 家族介護者の他者へのケアの委譲の様相の構成要素
家族介護者の他者へのケアの委譲の様相は、4つの家族介護者の認識と行動および4つの影響要因から構成された。

1)家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動

家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動として、以下(1)~(4)の内容が見出された。

(1)介護を抱え込む

[自己の介護観を貫く][要介護者の意向を尊重する]という信念の実現、[世間の目を気にする][身内からの圧力がある]という外圧への対処、[介護に熟練を要して任せられない][誰も自分を理解してくれないと感じる][社会資源、制度、サービスに不備を感じる]という委譲先が見つからないといった、家族介護者が介護を一人で抱え込んでいる様子が示された。

(2)一人で介護をやってゆける

[技術、介護に慣れる][自分の介護に自信がある]からなり、家族介護者が不安なく、技術を習得して、一人で介護を行うことが可能な状態が示された。

(3)拘束的思考から脱却する

家族介護者が自己の信念の実現、外圧への対処、委譲先が見つからないという介護の抱え込みを生じさせている思考から抜け出し、他者へケアを委譲してみようという気持ちへと変化する様子を示し、[人と場所の存在に安心する、楽になる][現在の介護支援に満足する][生活するうえでの気分転換になる、活気が出る][肩の荷が下りる][期待していなかった支援を肯定的にみられるようになる][治療以外の支援の存在に気づく]があった。

(4)他者にケアを委譲する

[相談する][愚痴を話し聴いてもらう][自分の気持ちを代弁してもらう][介護の協力を得る][家事の協力、分担がある][留守(見守り)を任せる][自分の代行をしてくれる人がいる][多職種への連絡・調整をしてもらう]といった他者へケアを委譲する様子が示され、委譲先には医療・介護専門職、家族員、友人、近隣が含まれた。

2)家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動への影響要因

家族介護者の他者へのケアの委譲にかかわる認識と行動への影響要因として、以下(1)~(4)の内容が見出された。

(1)委譲に向かわせる要因

家族介護者を介護の抱え込みから他者へのケアの委譲に方向づける要因として、[利用可能なサービスの紹介がある][家族の賛成、協力がある][近隣、社会の協力体制ができています]といった医療・介護専門職、家族員、近隣のかかわり、[要介護者

がサービス利用を拒まない][要介護者の状態が悪化する]といった要介護者の状況、[自分の考え方を切り替える必要性を認識する][介護に行き詰まりを感じる]といった家族介護者自身の気づきがあった。

(2)委譲を促進する要因

家族介護者が介護を一人で実践可能な状態から他者へのケアの委譲へと促進する要因として、[要介護者の病状が悪化する][介護力が低下する]があった。

(3)委譲を減退させる要因

家族介護者の他者へのケアの委譲を減退させる要因として、[技術、介護に慣れる][自分の介護への自信がある][家族内の能力が高まる]という家族介護者側の状況と、[社会サービスと要介護者および家族介護者のニーズが合わなくなる][社会サービスが打ち切りになる]という利用していた社会資源が利用できなくなる状況があった。

(4)家族介護者を後押しする他者の行動

家族介護者の他者へのケアの委譲を後押しする他者の働きかけとして、医療・介護専門職、家族員、身内、友人、近隣、社会からの[理解、共感する][ねぎらう][いたわる][協力する][弁護する][気遣う][励ます][肯定的に]評価する・保証する[橋渡しをする][要介護者の状況を教える]が示された。このうち、[[肯定的に]評価する・保証する][橋渡しをする][要介護者の状況を教える]は看護職のみによって行われていた。

3. 家族介護者による他者へのケアの委譲の様相

家族介護者による他者へのケアの委譲の様相は図のように構造化された。まず、家族介護者が一人で介護をしている状況には、《介護を抱え込む》状態と《一人で介護をやってゆける》状態が含まれていた。

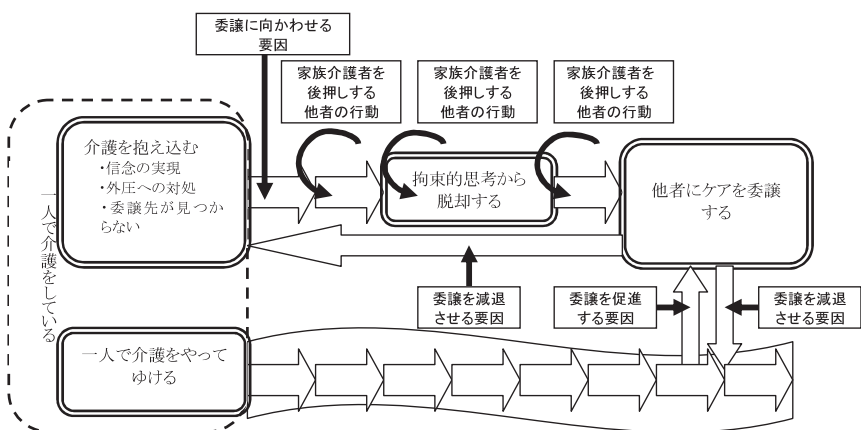


図 家族介護者の他者へのケアの委譲の様相

《介護を抱え込む》状態とは、信念の実現、外圧への対処、委譲先が見つからないなど、家族介護者の意思により誰にもケアを委譲していない状態である。この状態から《委譲に向かわせる要因》と《家族介護者を後押しする他者の行動》により、他者にケアを委譲してみようと家族介護者は《拘束的思考から脱却し》ていく。《拘束的思考から脱却し》、さらに《他者にケアを委譲する》家族介護者の変化へと導いていた《家族介護者を後押しする他者の行動》は、継続して行われる必要があった。家族介護者が《他者にケアを委譲》したのちに、従来利用していた社会資源が利用できなくなる事態《委譲を減退させる要因》が生じることにより、家族介護者が再び《介護を抱え込む》状態に戻ることもあった。すなわち、《他者にケアを委譲する》状態と《介護を抱え込む》状態は行きつ戻りつする可能性をもっていた。

《一人で介護をやってゆける》状況には、初めから家族介護者一人で介護が実践可能な場合と、いったん《他者にケアを委譲する》状態になってから〔技術・介護に慣れる〕〔自分の介護に自信がある〕〔家族内の能力が高まる〕という《委譲を減退させる要因》により再び《一人で介護をやってゆける》状況に変化した場合があった。また《一人で介護をやってゆける》状況から《委譲を促進する要因》である〔要介護者の病状が悪化する〕〔介護力が低下する〕ことにより《他者にケアを委譲する》状態に変化することもあった。《一人で介護をやってゆける》状況には、家族介護者がゆとりをもって介護している状態からバーンアウト寸前の状態までの幅があり、揺らぎがみられた。

VI. 考 察

1. 家族介護者の介護の抱え込みの状態と一人で介護をやってゆける状態の見極め

メタ統合から明らかにされた家族介護者の他者への委譲の様相においてまず着目すべき点として、家族介護者が一人で介護をしている状況には、《介護を抱え込む》状態と《一人で介護をやってゆける》状態が含まれていたことがある。この状態は一見、外部からは家族介護者が一人で介護をしている状況として同じように見える可能性があるため、看護職は家族の介護協力やサービス利用のない家族介護者に出会ったときにまず家族介護者が介護の抱え込み状態にあるのか、一人で介護をやってゆける状態にあるのかを見極める視点を持ち合わせることが必要である。さらに、《一人で介護をやってゆける》状態は、家族介護者が不安

なく、技術を習得して、一人で介護を行うことが可能な状況を示すのに対し、《介護を抱え込む》状態は、介護に対する信念の実現、世間や身内などの外圧への対処、ケアの委譲先が見つからないという状況から構成されていた。このことより、介護の抱え込みの状態をひと括りに捉えて他者へのケアの委譲へと推し進めるのではなく、その裏にある家族介護者の心のうちを察し、確かめたうえで、他者へのケアの委譲が家族介護者にとってどのような意味をもつのかを熟考しながら支援していくことが重要であると考えられた。

2. 家族介護者を他者へのケアの委譲に導く働きかけのあり方

在宅療養者と家族介護者の健康を守るために必要だと判断された場合には、介護を抱え込んでいた家族介護者を他者へのケアの委譲に導く働きかけが必要となる。そこには、家族介護者の《拘束的思考から脱却する》過程があり、《委譲に向かわせる要因》や継続的な《家族介護者を後押しする他者の行動》が欠かせないことが明らかになった。《委譲に向かわせる要因》をつくり出し、それが現れたときにタイミングよく家族介護者を後押しすることが、他者へのケアの委譲をスムーズにすると考えられた。娘および嫁の家族介護者を対象とした研究結果であるが、社会資源の導入の決定にあたって家族介護者は、外部資源の利用可能性、介護者の家庭内権力レベル、自己の限界の認可可能性の3事項のバランスを注意深く見極めて自分の行動を決定することが明らかにされている⁹⁾。本研究で見いだされた、〔肯定的に〕評価する・保証する〕〔橋渡しをする〕〔要介護者の状況を教える〕といった看護職による《家族介護者を後押しする他者の行動》は、家族介護者の判断を助けることや代弁者となるなどこれらのバランスの見極めに寄与する内容を含んでおり、自分が介護をしなければならぬという拘束的思考から家族介護者を解放し、納得した他者へのケアの委譲へと導くための重要な支援であると考えられる。

3. 家族介護者が一人で介護をやってゆける状態の見守りの必要性

家族介護者が《一人で介護をやってゆける》状態には、家族介護者がゆとりをもって介護している状態からバーンアウト寸前の状態までの幅があり、揺らぎがみられた。そして、《委譲を促進する要因》として、〔要介護者の病状が悪化する〕〔介護力が低下する〕が、《委譲を減退させる要因》（《一人で介護をやってゆける》状態を促進する要因）として、〔技術、介護に慣れる〕〔自分の介護

表 分析対象論文一覧

著者	年度	領域	種別	タイトル
北山 三津子	1995	地域	博士	高齢者を介護する家族の学びの特質に関する研究
新村 順子	1995	地域	修士	痴呆性老人の家族介護者側の介護受容に関する研究
佐藤 弘美	1998	老人	修士	人工呼吸器を装着して在宅療養する筋委縮性側索硬化症患者と介護者が療養の過程で築きあげたもの
本田 彰子	1998	成人	博士	終末期がん患者の家族の移行－家族の移行のプロセスと看護介入
岩崎 弥生	2000	精神	博士	精神障害者をケアする家族の困難と対処－家族の応答性と自己配慮
長谷川喜代美	2002	地域	修士	家族介護における主介護者の肯定的認識に着目した看護援助に関する研究
柴田 純子	2002	成人	修士	在宅終末期がん患者を介護している家族員の体験と家族員への看護に関する研究
篠崎 友子	2003	訪問	修士	療養安定期の在宅介護を担う主介護者の訪問看護サービスへの期待に関する研究
鈴木 香里	2004	地域	修士	家族介護における主介護者と外部支援者との二者関係に着目した看護援助
新井 香奈子	2004	訪問	博士	摂食・嚥下障害者の主介護者の主体的な介護の取り組みを促進する看護
篠原 裕子	2004	訪問	修士	脊髄小脳変性症者と家族介護者の生活プロセスに着目した研究
辻村 真由子	2004	訪問	修士	在宅要介護者を介護する家族の排便介助の経験に関する研究
天谷 真奈美	2005	精神	博士	社会的ひきこもり青年を抱える親への看護援助に関する研究－エンパワメントの視点から

への自信がある] [家族内の能力が高まる] が、それぞれ見いだされた。看護職には、《一人で介護をやってゆける》状態が家族介護者の介護の抱え込みや委譲と行きつ戻りつする可能性をもつことを念頭に置きつつ、療養者、家族介護者、家族全体を視野に入れて委譲を促進する要因、減退させる要因を注意深くモニタリングし、家族のもつ力を的確に捉え、タイミングよく必要な支援を実施していく役割をとっていく姿勢が必要であると考える。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、一次論文を慎重に選定し、事例の背景や概念化の根拠となるデータ・資料を十分備えた修士・博士論文を対象とした。しかし、一大学の学位論文のみからの統合結果であるため、概念化に偏りのある可能性は否めない。このため、知見の一般化には注意を要する。また、看護職としての支援を検討するために対象論文は看護学領域としたが、今後は他領域の論文へと対象を広げて検討してゆく必要性もあると考える。また、日本社会という文化的文脈の中での家族介護者の特徴を知る上では、今後海外の文献との比較を検討する必要があると考える。(本研究は千葉大学21世紀COEプログラム「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点」の研究の一環である)

引用文献

- 1) 柳原清子：【緩和医療と家族ケア】 家族理論にもとづいた家族アセスメントの方法とそのポイント. 緩和医療学, 10(4), 341-346, 2008.
- 2) 佐藤まゆみ, 増島麻里子, 柴田純子, 神間洋子, 櫻井智穂子, 眞嶋朋子, 小坂美智代, 伊藤道子, 本田彰子:終末期がん患者を抱える家族員の体験に関する研究. 千葉看護学会誌, 12(1), 42-49, 2006.
- 3) 佐藤奈保, 荒木暁子, 中村伸枝, 金丸友, 中村美和, 小川純子, 遠藤数江:障害をもつ乳幼児の家族の日常生活における体験に関する研究 家族のノーマリゼーションを視点とした meta-study. 千葉看護学会誌, 11(1), 71-78, 2005.
- 4) 林葉子:夫を在宅で介護する妻の介護役割受け入れプロセスにおける夫婦関係の変容 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる33事例の分析. 老年社会科学, 27(1), 43-54, 2005.
- 5) Burns, N., & Grove, S.K. (黒田裕子, 中木高夫, 小田正枝, 逸見功監訳):バーズ&グローブ看護研究入門－実施・評価・活用. 第1版, エルゼビア・ジャパン, 125, 2007.
- 6) 石垣和子, 山本則子:なぜいま質的研究のメ

- タ統合が必要か. 看護研究, 41(5), 351-357, 2008.
- 7) Paterson B.L., Thorne S.E., Canam C., and Jillings C. (2001) Meta-Study of Qualitative Health Research: A Practical Guide to Meta-Analysis and Meta-Synthesis. CA, Sage Publications.
- 8) Noblit, G.W. & Hare R.D. (1998). Meta-Ethnography: Synthesizing Qualitative Studies. CA, Sage Publications.
- 9) 山本則子：痴呆老人の家族介護に関する研究
娘及び嫁介護者の人生における介護経験の意
味 介護量引き下げの意思決定過程. 看護研究,
28(5), 409-427, 1995.